

# イネ縞葉枯病情報第2号

令和2年10月2日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

ひこばえは次作の伝染源となるため、速やかに耕起を行いましょう。

## 1 今年の発生状況

8月下旬における巡回調査では、本病の発病株率が0.05%（平年0.18%、前年0.16%）で、平年並でした。しかし、6月に実施したヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査において、一部地域で保毒虫率が高い地点があったため、注意が必要です。

## 2 イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。発病株を吸汁したヒメトビウンカはウイルスを獲得し、他のイネにも感染させます。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）。また、穂が出すくんだり、不稔になることにより減収します。

感染した株では、稲刈り後のひこばえで明瞭な病徴が表れ（図1）、これらが伝染源となり、ヒメトビウンカが吸汁することで保毒します。ヒメトビウンカはウイルスを保毒したまま越冬し、卵を通して幼虫にもウイルスが伝搬されるので、保毒虫率が高いと、次作のイネで発病が多くなる傾向があります。

なお、本県で栽培されている品種では「あいちのかおりSBL」、「あさひの夢」、「ゆめまつり」などが本病に抵抗性がありますが、「コシヒカリ」はありません。



図1 イネ縞葉枯病の症状  
(ひこばえにおける穂の出すくみ)

## 3 防除対策

- (1) ひこばえはヒメトビウンカの生息場所になるほか、発病株は病原ウイルスの伝染源となりますので、耕起し、ひこばえを放置しないようにしましょう。特に、ほ場内で図1のような感染株を確認したら、速やかに耕起しましょう。
- (2) ヒメトビウンカは畦畔等のイネ科雑草で越冬するため、ほ場周辺や畦畔等の除草を徹底しましょう。
- (3) 次作では、ヒメトビウンカを防除するため、育苗箱施薬等を行いましょう。

## 4 その他

6月に実施したヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査結果の詳細は、次ページの図2及び6月17日発表の「イネ縞葉枯病情報第1号」を参照してください。

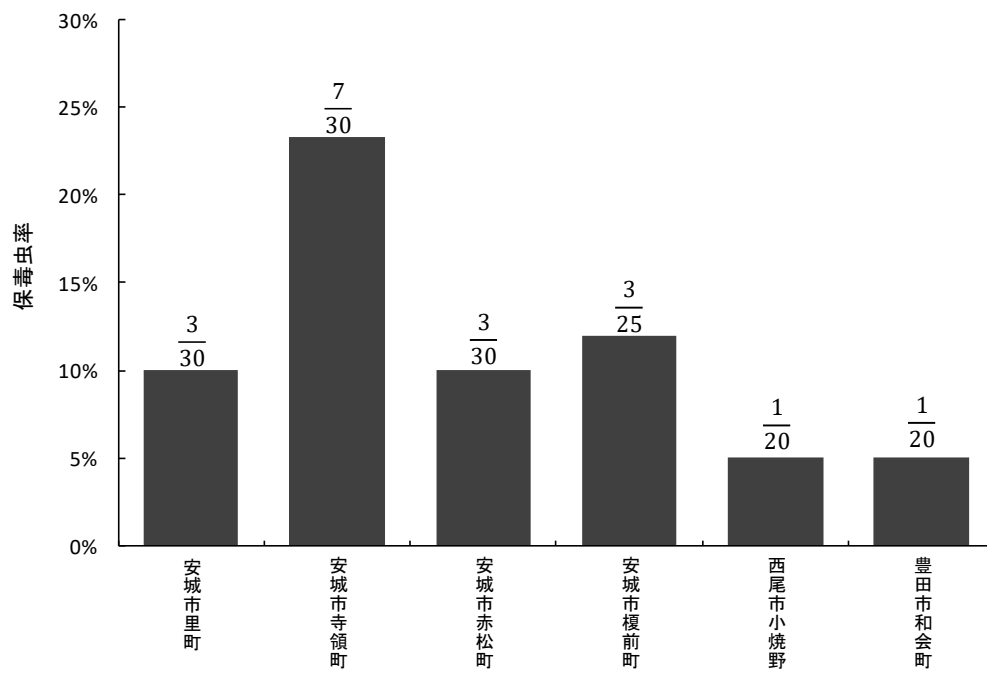


図2 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査結果（6月上旬実施）  
 保毒虫率が5%以上の地点のみ掲載  
 簡易ELISA法により検定  
 グラフ上の数字：保毒虫数/検定虫数